親鸞さま、なぜお念仏なの？ －出会おう、語ろう、今ここで－

第一回聞法会・報告

当日のお話の要約と感想です。お読み頂けたら有り難いです。

釈尊の生涯 ― 誕生～出家

藤谷知道

お釈迦さまのお誕生は今から二千五百年ほど前です。父はシャカ族の王、シュッドーダナ、母はマーヤーです。幼名はゴータマ・シッダールタと言いましたが、お覚りを開いてからは「仏陀（ぶっだ）（目覚めた人）」と呼ばれました。「釈迦」とか「釈尊」の呼称はシャカ族出身にちなんだ呼び名です。

インドという国は不思議な国で、国王や金持ちよりも宗教を尊びます。なぜなら、国王といえども金持ちといえども諸行無常の道理に勝てません。それよりも、決して消滅することのない真理の世界（宗教）を尊びます。そんな国にお釈迦さまは生まれました。

大いなる放棄

お釈迦さまは29歳の時、出家しました。何が問題で、家族を捨て、王の栄誉を捨てて難行苦行の道を選ばれたのでしょうか。お釈迦さまの出家につながると思われる二つのエピソードがあります。

「殺」によった「生」

一つは、お釈迦さまの少年時代のことです。農耕祭において、農夫が牛を鞭うち田を鋤（す）いていくと、小鳥がさっと飛んできて虫をついばんでいきました。あっと思っていたら、今度は鷹がその小鳥を捕まえたのです。その様子に、少年釈迦は、「あわれ生き物は、互いに食みあう」と悲しんで、閻浮樹（えんぶじゅ）の下でひとり寂（しず）かに瞑想（めいそう）しました。

少年釈迦はそこで何を見たのでしょうか。それは、自分が生き延びるためには他を殺さずにはおれないという、命がかかえている根源的な矛盾、「生・殺」の問題ではないでしょうか。

「死」に向かう「生」

もう一つは四門出遊（しもんしゅつゆう）の物語として親しまれてきた話です。幼い時から物思いにふけりがちなお釈迦さまを慰めようと、父王がカピラ城の外に遊びに行かせます。ところが、東の門から出たら老人に会い、南の門から出たら病人に会い、西の門から出たら死人に会って、いよいよ物思いに沈んだというのです。この物語において問題になっていることは、「生」は永遠でなく、必ず「死」によって終わるということです。「生」にとって「死」は根源的な矛盾であります。

人生は「苦」なり

農耕祭で見た「生・殺」の矛盾。四門出遊で見た「生・死」の矛盾。この二つの根源的な矛盾を内にかかえている人生は、いかにそれを忘れ、いかにそれから目をそらそうとも、その本質においては「苦」であるというのが、釈尊に突きつけられた問題であったと思います。

沙門（しゃもん）に遇（あ）う

それでは、解くに解けない課題をかかえてしまったお釈迦さまは、どうしたのでしょうか。釈尊は憂いに沈んだまま北の門から出た時、柿の衣をつけ、髭をそり落とし、手に鉢をもって厳（おご）かに歩む人に出会いました。その厳かな姿に驚いた釈尊は従者に「あれは何者か」と尋ねますと、従者は「真理を求めて出家した沙門です」と答えられた

如是我聞

渡辺重昭

勝福寺で「仏法」に出会ってまだ数年。最初に戸惑ったのは「お釈迦様」の呼び方でした。「釈尊」、「仏陀」、「世尊」、「釈迦牟尼世尊（むにせそん）」等々、同一人物なのか、どういう意味なのか大層戸惑いました。一人で本やネットで調べてもなかなか頭に入りません。そんな自分に体系立ててお釈迦様や仏法について学べるのは、大変有難いことです。この聞法会に参加することで、どれだけ「教え」が自分のものになるかとても楽しみです。

のです。ここに釈尊の歩むべき道が決まりました。釈尊は家族の嘆きを振り捨てて、「苦」からの解脱を求めて出家しました。それは釈尊の29歳の時でした。

念仏生活を妙好人に学ぶ

第一回「榎本栄一さん」

藤谷純子

榎本栄一さんは、幼い頃より病弱でした。自身も結核を患ったが妹や弟そして父親も亡くしたので、十九の時から母親と化粧品小間物屋さんを営んできました。若いときに暁烏先生や金光教の高橋正雄先生、そして松原致遠先生のお話を聞いていたけれども、お念仏が申されるようになったのは六十才頃だそうです。その頃より内観詩のようなものを書くようになったということです。

南無阿弥陀仏をとなうれば
自分の我執も
人の我執も
共に 照らされ

この詩について、次のように記しておられます。

「念佛申せば自分が見える。自分が見えるというのは、我執も煩悩ですので、自分の我執が見える。自分の我執が見えてくると、人の我執も見える。「向こうさん、えらい言い訳してはるが、それももっともや、無理もないなあ」というふうに、自分の我執も見えてくるけども、人の我執も共に照らされて、聖徳太子やないけども〝共に凡夫のみ〟、我も人も同じやと、こういうような感じになるわけでございます。」

このように阿弥陀仏の光明によって見えてきた自他の生きている世界を、自分の都合で善し悪しを立てないで、そのままを温かく見ること、むしろ拝んでいただくようになりたいとおっしゃっています。

榎本栄一さんのお念仏をこのように聞かせていただきました。

最後に榎本さんの詩をいくつか紹介しておきます。

摂取光

この光にふれたら
虫はむしにうまれて
よかったと申します
ひとは　この私にうまれて
よかったと申します

あるがままの
御光照をこうむりながら
業を生きる
あるがままの自分に手を合わす
如来さまは
智慧光にまします
慈悲光にまします

恭敬

家族を
むかしは教えようとし
いまは　あるがままを
しずかにみる
ひそかに
恭敬するようになりたい

第1回目は天気にも恵まれ、64名の方がお参りくださいました。

如是我聞

渡辺久仁子

「妙好人」―― 私がこの言葉を知ったのは最近です。どのような人を「妙好人」と呼ぶのかよく分かりませんが、お寺に行くと、感心させられる人がいます。この人たちも妙好人、またはそれに準ずる人なのだろうかと思うことがあります。

聞法会の一回目は、榎本栄一さんの生涯を、詩を音読しながらたどりました。私は初めて読んだこともあり、とても新鮮でした。わずか四行から五行の詩ですが、わかりやすく生活に基づいた言葉が続きます。

このときの榎本さんの心象風景はどんなものだったろうか、一つ一つの言葉の中にどれだけの想いが込められているのだろうか、と音読しながら思いました。私は私の体験、経験してきただけしか想いを受け取ることができません。今回の聞法会を機に改めて、少しでも自分の器を大きくし、二回目以降の妙好人の方々の想いをたくさん受け取っていきたいと思います。

第二回
「釈尊の生涯
成道～涅槃」
藤谷知道

「因幡の源左」
藤谷純子

3月10日午後1時半～